

UNIVERSITY OF

YAMANASHI HOSPITAL

30th Anniversary

第2章

● 30周年に寄せて



山梨大学医学部附属病院 30周年を記念して

病院長
島田 眞路

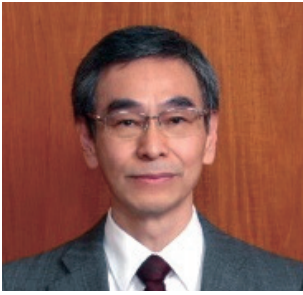
早いもので本院が開院してから今年で30年、大変感慨深いものがあります。私は昭和61年、恩師の要請を受け開院から3年経った当院に留学先のNIHから助教授として赴任、見渡す限りの田畑の中に建つ真新しい当院の姿が印象的でした。

途中3年間母校の東大病院に戻りましたが、平成7年教授として再赴任、以来今日に至り通算23年間を当院と共に歩んで参りました。はからずも4年前の平成21年4月、病院長を拝命しました。この間様々な出来事がありいつも全力で対応し、現在に至っています。日本医療機能評価機構Version 6受審に始まり、東日本大震災では南三陸町医療支援（3月18日-5月13日、計22班、124名派遣、私自身も2回訪問）、4年間で約30億円の増収、経費削減による収支の大幅改善、地域医療崩壊阻止のため県との協力のもと、地域医療支援センターの設立や峡南医療センター（市川三郷町立病院と社会保険鯉沢病院の統合）設立、看護部の改組（3か月間看護部長を兼任）など、数々の困難な課題を乗り越えてまいりました。

ただ何と言っても病院長拝命時の最重要課題は病院再整備計画の遂行であり、その中心は新病棟建築でした。このプロジェクトは順調に進んでおり、本年5月に起工式を無事済ませることができ、現在建築工事中であります。平成27年6月には完成予定です。すべての病院職員のご理解ご協力があったからこそここまでこぎつけることができました。新病棟建築という大事業に携わることができたのは私にとっては人生の中でも最大の出来事と思っています。新病棟のテーマは、急性期・重症・手術・周産期のキーワードでその方針にのっとり新病棟を配置させていただきました。手術室は十分広くとり、“ダヴィンチ”や天井吊り下げ型MRIなど最新の機器も十分に活用できるようになっています。また先行する新放射線治療センターでは強度変調放射線治療装置（トモセラピー）や新型リニアックを導入、急速に発展する放射線治療にも対応しています。

病院長就任当時、“Version 6”を受審した際、1回での合格は極めて困難といわれる中一発合格しました。これは本院の安全・感染対策やチーム医療などソフト面での医療レベルの高さを物語っていますが、その際唯一指摘を受けたのは建物や設備の老朽化でした。今回の病院再整備でこのハード面を一新すれば間違いなく日本一の病院を目指すことができると確信しています。二年後には新病棟に続き、旧病棟、外来、中診施設の改築が始まります。診療科や中診、外来の配置などはほぼ決まっています。“病院全体がひとつのチーム”というスローガンのもと、安全管理などに取り組んでまいりましたが、病院再整備の際にもその精神が十分に発揮されています。平成30年にはこれらすべてが完成する予定ですが、今から大変楽しみにしています。

最後に、この30年間、本院の発展に尽力いただいた関係の皆様にはこの場を借りて感謝申し上げます。本院の更なる飛躍に向けて、今後とも一層のご支援とご協力をお願い申し上げます。



山梨大学医学部附属病院の 開院30周年を祝して

学長

前田 秀一郎

本年、山梨大学医学部附属病院が開院30周年の記念すべき時を迎えたことを、山梨大学医学部に基礎医学教員として勤めた学長として大変嬉しく思い、心からお慶び申し上げます。この記念すべき時を迎えることが出来たのは、偏に本病院の業務遂行、機能強化と発展のために、開院以来この30年間に、尽力された本学のすべての教職員各位、並びにご支援、ご指導を戴いた山梨県、文部科学省、厚生労働省等行政機関の皆さま方のおかげであり、心より感謝申し上げます。

現山梨大学の前身の山梨医科大学は、昭和53年度に開学しました。昭和63年度、当時の副学長・病院長で、その後、第2代山梨医科大学長を務められた鈴木 宏先生は、開学十周年記念誌に山梨医科大学医学部附属病院の将来の展望を以下のように述べておられます(抄出)。「本病院も開院後5年を経過し、漸く軌道に乗ってきたといえる。しかし、その運営状況は必ずしも良好とはいえない。病床利用率、医療比率、保険診療報酬の査定率は、すべて全国国立大学附属病院の平均を下回っている。現在、改善の方向に向いつつあるが、これらの向上を目標に努力を行なって行きたい。特殊診療施設は新設医大にみられる特殊なもので、それ以外の大学では中央診療施設となっている。一日も早くすべての特殊診療施設が中央診療部の一員として認められることを期待しているが、現実にはひじょうに困難である。輸血部、集中治療部、救急部の順に要求を行う予定であり、これが達成された時点で漸く一応の診療体制が出来上がったといえるのではないかと考えている。本病院はまた山梨県の地域医療の中核病院の一つとして、大きな寄与をしていると信じているが、今後一層の充実を計って行く予定である。」

鈴木先生のご計画通り、本病院は、その後短期間で経営改革、機能強化を成し遂げ、診療科、並びに中央診療部門数も増加し、現在では、山梨県唯一の総合的医療人育成機関、高度な医療を提供する特定機能病院として、また地域がん診療連携拠点病院、地域周産期母子医療センター、肝疾患診療連携拠点病院や山梨県地域医療支援センター等として地域医療の中核的役割を担っています。また本病院と医学部では、先端的医学研究を推進して、先進医療技術の開発や健康長寿社会の構築等に寄与すると同時に次代を担う優れた医師、看護師、研究者を育成しています。特に最近では、本病院の質の高い医療の実践と安全活動の実績が高く評価され、日本医療機能評価機構による病院機能評価バージョン6の承認を国立大学病院として二番目に獲得しました。さらに本年度からは、先進医療や高度医療研究の遂行、患者さんの療養環境の改善、並びに高度医療人の育成機能の強化等に対応するための病院再整備事業に基づく、念願の新病棟の建設が始まりました。新病棟は平成27年度に完成、既存病棟、外来・中央診療棟の改修は、平成30年度に完成の予定です。このような本病院の着実な発展のため、ご尽力、ご支援を戴いたすべての皆さま方に改めて厚く御礼申し上げます。

一方、山梨大学では、教育・研究・社会貢献機能を強化させるため、平成14年度以来、大学統合、医工融合大学院設置、農学系の生命環境学部の新設、教育人間科学部や工学部の改組等の組織改革を推進してきました。今後も引続き組織改革を実行し、社会の要請に応えることのできる大学であり続けたいと思います。そのためには、国際的な水準で研究活動を展開し、研究活動を通して優れた課題探究能力と応用力を持った国際的に活躍できる人材を育成することが必要です。同時に、県下唯一の国立大学として、全学を挙げて地域貢献を十分に担うことを目指しています。質の高い優れた研究活動、並びに地域貢献の双方において重要な役割を担う、わが医学部附属病院の今後のさらなる発展を心から期待申し上げます。



財務・医療・施設担当理事の 病院との関わり

理事（財務・医療・施設担当）

佐藤 悠

山梨大学医学部附属病院開院30周年記念誌への寄稿の機会を与您いただき関係各位に感謝申し上げます。理事として病院への関わりについて述べさせていただきます。

財務担当理事として：

病院は山梨大学にとって財務的に非常に大きな存在です。たとえば平成24年度は大学の一般運営費交付金の当初予算が約85億円であったのに対し病院収入は146億円と、収入規模は1.7倍にも達しています。文科省への財務報告は大学全体としてなされますので、病院の財務状況は大学の財務状況評価に大きな影響があります。ですから財務理事としては病院経営を見守る必要があります。最近の病院財務状況はすばらしく、病院収入は、毎年、億円単位の増収が続いております。病院執行部をはじめ各診療科各位の努力には敬服いたしております。増収分は病院経営に支出しております。理事としては、文科省への特別経費概算要求ヒアリング、国家公務員給与削減に対応した本学教職員給与削減時の看護師給与の維持、どんぐり保育園の1歳児保育等、事あるたびに病院経営にプラスとなるよう貢献しています。

医療担当理事として：

中期計画の各年度計画実績を文科省に提出するにあたって、病院分の報告書の作成とチェックに携わっています。また、県内医療機関の統合計画に関する大学の関与形態について、法律、県条令と整合性を照らし合わせて検討しました。このため、病院運営全般に涉って事務報告を受けています。

施設担当理事として：

大学全体の施設の新営、改修、耐震、維持等に携わっています。現在15事業の並行実施で施設課は空前の忙しさです。このうち病院は病棟新営の最中であり、今年は4年計画の2年目で、計画とおり順調です。現病棟の再整備はマスタープランの段階であり、構造体に手を加えることに法的制限があり、厄介なことに耐震基準自体も強化されています。今後、調整が必要です。融合研究臨床応用推進センターの新営に当たっては、病院より資金援助をいただき、2階建から4階建になりました。感謝いたします。

以上、財務・医療・施設担当理事として病院とさまざまな関わりがあることを皆様にご理解いただけたら幸いです。今後30年間を見据えた病院の発展のために尽力する所存です。



医学部附属病院 開院30周年に寄せて

医学部長

武田 正之

山梨大学医学部附属病院は昭和58年10月に開院し、平成25年10月に30周年を迎えました。30年にわたり本院の発展にご尽力頂きました教職員の皆様に心より感謝し、敬意を表します。そして今、新棟建設とともに診療研究に日々新たな取り組みを推進している病院の皆様に、心より感謝を申し上げたいと存じます。文部科学省、山梨県、関連医療機関の皆様のご支援、ご理解にも感謝しますとともに、今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

私が平成11年6月に本学に赴任した際には、かなり新しく見えた附属病院も、開院25年を経過すると新しい医療への対応が難しくなってきました。私は平成21年4月から平成25年3月まで副病院長(医療安全担当)を務めましたが、その最中に病院機能評価Version 6を受検することとなり、すでに病院がかなり老朽化していたために当時の最新Versionにどのように対処すべきか、かなり苦勞致しました。また、当時は医療費抑制政策・国立大学の法人化・医師初期研修必修化・7対1看護への転換等が始まったばかりで、激しい医療環境の変化に何とか対応しようとした時期でしたが、本院では皆さまの力強い、前向きな努力とチームワークの成果もあり、この難局を乗り越えて開院30周年に至ったことに感謝申し上げます。

本学医学部は、昭和53年の開学(当時は旧山梨医科大学)以来すでに35年を経過しています。卒業生は本学のみならず、他大学附属病院、各地域の中核病院などで活躍しており、本学も含めてすでに多くの医学部教授を輩出しています。またその力量や医療人としての在り方が高く評価されています。本学医学部の理念は「国民に信頼される良き医療者の育成」であり、その目標は、①正しい倫理観を持ち、地域医療に貢献できる医療者(医師・看護師)の養成、②国際的な視野を持つ医療者(医師・看護師)の養成、③世界に通用する優秀な医学研究者・看護学研究者の養成、の3点ですが、附属病院には、これまで医学科学生、看護学科学生の臨床教育に対して、上記の目標達成のために多大なるご協力を賜っています。

さて、本学医学部の直近の重要な課題のひとつが、医学科における「国際基準に基づく医学教育認証評価制度」への対応としての、カリキュラム、特に臨床実習の大幅な改訂であります。この問題解決には長期間のclinical clerkship(CC)の採用など、附属病院の多大な協力が不可欠であります。

本学医学部附属病院は①診療機能、②教育機能、③研究機能を合わせ持ち、それぞれの機能を高度に発揮する特定機能病院です。今後、国立大学附属病院には、さらに数多くの質の高い良き医療人の輩出、高度先進医療の提供および優れた臨床研究成果の国際的発信が、求められています。こうした成果の蓄積が、本院のブランドをますます高めるものと期待しています。



山梨大学医学部附属病院 開院30周年に寄せて

前学長
貫井 英明

私は附属病院開院から半年遅れで、「誰にも負けない脳神経外科を創る」という熱い思いを抱いて、山梨医科大学に6名の仲間と赴任して来ました。

当初は環境が違うため戸惑いましたが、全ての職員が「自分たちの力で一流の病院にするのだ」という熱意を持って働いているのが感じられ、自分の科のみならず病院の充実にも力を尽くすことが当たり前だと思うようになりました。

私にとって最初の大仕事である救急・集中治療部の立ち上げでは、様々な苦勞の末に開設したにも拘らず、大学首脳部の方針から約4か月間患者の受け入れが出来ず、配置されたスタッフに大変苦勞を掛けた苦い思い出があります。

やっと受け入れが許可された患者は、連絡とは違って軽症で集中治療の対象ではありませんでしたが、首脳部には伝えずそのまま活動を継続しました。

その後時間外患者も救急患者に繰り入れる工夫(?)により救急・集中治療棟(特殊診療棟)の建設が認められ、病院長専任に伴う教授籍の転用による救急医学専任教授職の新設やスタッフの増員等により、現在のような充実した救急・集中治療部になったことはとても喜ばしいことです。

またその当時は診療費の査定率が高かったため、審査で得た知識を基に査定率低減のために「保険常識集」を纏め、堀畑課長、桜本補佐と協力して病院の諸経費削減のための様々な工夫を行い、国立大学附属病院では初めてである稼働率に応じた病床数見直しや外来の予約診療制度の導入を行いました。

その後塚原病院長の基で副院長として、佐藤(弥)教授、石原、山田両君等と共に、病院経営状況の詳細な分析を行い、改善すべき点に関する対応策を積極的に実行した結果、文科省による経営管理指数に基づいた順位で、何度も全国一位になり、病院経営管理部が認められました。

しかしその当時何度も熱心に文科省と折衝した病院再開発は建設年度順の壁を破ることはできず悔しい思いをしましたが、やっと今年度に病院再開発が認められ、長年の夢がかなったと大変喜んでます。

また看護学科教員も参加するという全国でも珍しい体制で開設した医療福祉相談室は、その後有田師長を始めとする関係者の努力により現在は医療福祉支援センターとして充実した活動が続けられているのは周知の通りです。

更に全国で先駆けて患者満足度調査を始めたり、病院の理念を発表したのもこの時期で、塚原病院長を先頭に皆で力を合わせて様々な改革に取り組んだ活気のある楽しい時期でした。

その後も時間外手当支給制度の確立や血液内科教授職の新設を行い、学長になった後も病院経営に関心を持ち続け、病院経営が順調にいくよう協力をしていまして、どنگり保育園の設置やコーヒーショップの誘致はその一環でした。

病院が熱意をもって活動してきた多くの人達の努力により、開設時に比べあらゆる面で素晴らしい発展を遂げたことは誰の目にも明らかです。

その中に在って病院の発展に多少なりとも貢献できたのは大変幸せなことですし、支援・協力してくださった多くの人達に感謝しています。

今後も開設時の熱意を忘れず、常に未来を見つめて行動することにより、病院がますます発展することを期待しています。



お祝いのことば

山梨県知事
横内 正明

この度、山梨大学医学部附属病院が開院30周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

山梨大学医学部附属病院は、昭和58年に山梨医科大学医学部附属病院として開院以来今日まで、本県唯一の大学病院として、地域医療を担う人材の養成や高度医療技術の開発など、本県の医療水準の向上に大きな役割を果たして来られました。島田院長をはじめとする歴代の病院長の皆様方並びに関係の皆様方のご尽力に対し、深く敬意を表するところでございます。

この30年の間、保健医療を取り巻く環境は大きく変化し、医師の絶対数の不足や地域間、診療科間の偏在、急激な高齢化と出生率の低下、生活習慣病の増加など、様々な課題が生じており、県では、「暮らしやすさ日本一」を目指して、県民の豊かな生活を守る保健医療の充実を図るため、医師の確保・定着対策や医療提供体制の整備に努めております。

こうした中、山梨大学医学部附属病院におかれては、寄附講座により、地域医療機関の連携推進や、分娩取扱医療機関のない地域へのセミ・オープンシステムの導入等のための研究を行うとともに、医師不足地域への医師派遣など、地域医療の充実に取り組んでいただいております。

また、県内唯一の特定機能病院として、地域の中核的医療及び高度医療を担うとともに、地域周産期母子医療センター、地域がん診療連携拠点病院、救命救急医療機関等として、政策的な医療の提供に大きな役割を果たしていただいております。

さらに、東日本大震災におきましては、被災地の南三陸町に3月18日から5月13日まで、継続的に医療救護班を派遣し、被災者の生命の安全確保等にご尽力されるなど、災害時の医療救護活動にも積極的にご協力をいただいております。

山梨大学医学部附属病院には、これまでもこうした様々な面で、本県医療に多大なご貢献をいただいているところですが、現在、高機能手術が可能な手術環境や屋上ヘリポートを備えた新病棟の建設が進められており、今後一層、本県医療の中心的な役割を果たしていただけるものと大いに期待しております。

結びに、この度の開院30周年を契機として、山梨大学医学部附属病院が益々ご発展されることを祈念するとともに、今後とも本県医療の向上のため、ご支援、ご協力をいただきますようお願い申し上げます。お祝いの言葉といたします。



山梨大学医学部附属病院 開院30周年に寄せて

中央市長

田中 久雄

山梨大学医学部附属病院開院30周年を迎えるにあたり、心よりお祝い申し上げます。

昭和58年10月の開院以来、院長はじめ関係各位のご努力により、年々医療設備が整備拡充され、地域住民の健康の確保と向上に多大な貢献をしてこられましたことは、誠にご同慶にたえず、各位のご努力とその熱意に対しまして、深甚なる敬意を表します。

また、山梨大学医学部附属病院は、県内唯一の特定機能病院として、地域の中核的医療及び高度医療の要であるのと同時に、診療を通じて教育・研究を行う中で、医療従事者を養成する役割を担って頂いており、衷心より感謝申し上げます。

さて、医学部附属病院は開院30周年を迎える本年、病院再整備事業の一環として、新病棟の建設に着手されました。新病棟は、免震構造鉄筋コンクリート造 地上7階建 延床面積20,916.4㎡ 病床数356床となり、屋上にはヘリポートが整備され、既存病棟を含めた病床数は606床となると伺っています。患者が求める先端的で高度な医療の提供はもとより、療養環境も飛躍的に向上するものと、ご期待申し上げます。

人間にとって健康でありたいと願うことは、最も根源的な願いの一つです。現代社会は一層気ぜわしくなり、私たちの心身は絶えず病気の危険にさらされています。そういった状況のなか「まず健康であること」健康で日々を過ごせることは、それだけで幸せなことだと思います。だからこそ、ひとたび病に冒されたときに、優秀な医療スタッフと先端の医療施設が身近にあるということは、どんなに心強いことでしょうか。日々の暮らしに向き合うなかで、病に対する憂いが軽減されることは、どれほど心を安らかにするのでしょうか。医学部附属病院には地域住民の健康を守る拠点として、また、地域医療に対するニーズに応える基幹病院としての役割を引き続き担って頂きますようお願い申し上げます。

院長はじめ各位におかれましては、この記念すべき30周年を契機といたしまして、診療内容の充実・専門化と機能の向上を図り、病院の理念として掲げた「一人ひとりが満足できる病院」の実現と地域住民の健康の確保のため、なお一層ご尽力賜りますようお願い申し上げますとともに、病院の更なる発展と皆様のご健勝をご祈念いたしまして、ごあいさついたします。



開院30周年に寄せて

山梨県医師会会長
薬袋 健

山梨大学医学部附属病院の「診療、教育、研究」の30年間に及ぶ成果は素晴らしく、地域への寄与、誠に大であります。

30年もの長きにわたり、本院の発展に、多大の貢献をされた多くの関係各位に、心より深く敬意を表します。

本年6月より新病棟の建設工事が始まったとのこと、2年後には地域における中核的医療機関として、日進月歩の最先端最新医療が提供されるものと、大いに期待いたします。

さて、急速に進む超高齢化で、これからの医療や介護の費用は経済の規模が拡大する以上に増えることは確実であり、本年8月に社会保障制度改革国民会議で決めた医療や介護への財源の確保が本当にできるのか疑問です。限られた財源を、より有効に使うためには「いつでも、どこでも、だれでも」は、これからは「必要な時に、必要な医療・介護が受けられる」としてフリーアクセスを考えようというのが国民会議の提案です。

それで、本年4月に発足した本院と県の主導する「山梨県地域医療支援センター設置」の構想は重要です。私達医師会も、これに積極的に協力しなければなりません。常に長寿日本一を目指す県民の健康を守るため、更なる地域医療・介護の崩壊を防ぐためにも本院との密接な病診連携は、これから益々必要になります。

最後に、私達医師会員のために昭和62年より大学医師会は医学講座を年2回開催して下さり、それから、得られる知見は日常の診療に非常に役立っています。その他に山梨総合医学会や日本医師会生涯教育講座等にも、ご協力をお願いしており、本院の多くの関係各位に改めて感謝申し上げます。

結びにあたり、本院の更なる発展を祈念して、ご挨拶といたします。



山梨大学医学部附属病院 開院30周年に寄せて

山梨大学医学部後援会会長
渡邊 浩二

山梨大学医学部附属病院が開院し30周年を迎えますことを心よりお慶び申し上げます。

この附属病院は山梨県の中核をなす高度先端医療の拠点として、また同時に新設医科大学の実習・研修の場として設置され、県内にお住まいの方々をはじめ、医療に従事する方々そして医学を学ぶ学生たちの大きな期待と共に開院されました。開院間もない80年代半ば、当時大学院生として本学に在籍していた私は、病院の天井に張り巡らされたレールを行き交うカルテを見て、まさに新しい時代の到来を感じておりました。しかしその進歩は私の想像を遥かに超え、今やカルテはすべて電子化され、病院内はもちろん日本国内ばかりか世界中で共有されようという時代です。まして医療の核となる治療技術やそれに必要な設備の革新はより一層目覚ましく高度であり、新設の大学病院が世界のレベルに肩を並べるのは並大抵ではないと言うことは想像に難くありません。そのような中、当大学病院は開院以来30年、着実に機能を充実させ実績を重ね、特定機能病院や様々な疾患の拠点病院として、地域からはもちろん公的機関からも絶大なる信頼を得られておりますことは周知の通りであり、病院関係各位の御尽力に深く敬意を表する次第です。また医学的な面のみならず、院内の空調、静寂、照明採光を始め絵画や観葉植物などのインテリアにいたるまで、さらには定期的なコンサートや祭りなどのイベントの実施などを通じ、癒しの環境にも十分に配慮されていることが日本医療機能評価機構から高く評価されております。このことは医療が決して知識と技術によってのみもたらされているものではないと言うことを示しているに他ならず、このような姿勢である限り今後いかに医療が発達しようとも、それを必要とされる方々の人間としての尊厳が置き去りにされる事なく、常に最良の「手当て」が提供されるものと確信し大変心強く思います。近年、「病院の実力」として設備、技術、人員、症例数などが数値で比較されておりますが、数値には表すことのできない、現場で活躍する方々の崇高な精神こそが真の病院の実力を示すかけがえのない財産であると思います。

私ども医学部後援会は、学生の教育環境を側面からサポートし、多くの素晴らしい医師、看護師を病院に送り出すことに心血を注ぎ、微力ながらその運営に貢献して参りますことをお約束し、本大学病院の益々の発展を心よりご祈念申し上げます。



山梨大学医学部附属病院 開院30周年に寄せて

山梨医科大学・山梨大学医学部同窓会会長
野田 嘉明

山梨大学医学部附属病院開院30周年、おめでとうございます。

これまでの30年間に、本学学生、研修医、臨床医の教育・研究・臨床でのさまざまな場面でお世話になった歴代病院長ならびに附属病院の関係者の皆様に同窓会を代表してお礼とお祝いを申し上げます。

さて、私ども1期生が山梨医科大学に入学した昭和55年には、まだ附属病院は影も形もありませんでした。まだ整備されていない広々した敷地の片隅に小さな講義棟がひとつ、ぽつんと建っているだけの状態からのスタートでした。期待と不安の混在した複雑な気持ちで臨んだ入学式典を懐かしく思い出します。その後、昭和58年に附属病院が開院して以来30年、大学および病院関連施設が続々と建設され、周囲の街並みや環境までもが目を見張る変貌を遂げました。建物や施設だけでなく、そこで関わる我々同窓生も、そして疾病構造にも変化がみられます。その変化は、一時、本学附属病院で研修を行う卒業生が著しく減少するという形で現れました。医療に関しては次々に高度先進医療技術が導入され、今日では当たり前の日常診療となっています。疾病構造に関しても癌と認知症の増加による癌治療・高齢者医療・終末期医療に対する取り組みが大きくクローズアップされてきています。さらには、救急医療や災害医療など多面的な機能の維持はもちろん、その中心的・指導的役割が大学と附属病院に求められています。山梨県の医療の総本山としての附属病院への期待の大きさに比例して、そこに従事する医療現場の関係者の負担が増えているのも事実です。このような状況下で同窓会としてどのような貢献ができるか、これまで以上にその存在意義が問われています。卒後臨床研修医の確保に向けての働きかけや、学生・卒後臨床研修医への多面的なサポートなど、これからも積極的に取り組んでゆく必要があります。この問題は同窓会の継続的な課題の一つと位置付けています。現在、本学医学部附属病院で診療にあたっている医師の8割、看護師の3割が本学の卒業生です。附属病院は本学同窓生と一心同体の関係にあると言っても過言ではないでしょう。同窓会として今後も本学附属病院と手を携え、協力し合いながら山梨の医療に貢献してゆきたいと思います。



山梨に30年

山梨県官公立病院等協議会長
国立病院機構甲府病院長

長沼 博文

私が山梨県に来てから30年余りになります。初めて山梨県に来て感じたのは、山梨は周囲が山に囲まれ私にとっては住みやすい所だなという印象でした。私は隣の長野県飯田市の出身で、中央アルプスと南アルプスの間にある伊那谷で育ったせいか、周りに山が見えないと何となくしっくり来ません。

私は昭和52年に群馬大学医学部を卒業し、脳神経外科学教室に入局し昭和58年に脳神経外科専門医資格を取得しました。昭和59年4月に山梨県立中央病院に赴任し、昭和61年4月に山梨医科大学に助手として赴任となりました。私が脳神経外科医になった頃は、脳神経外科は人気があり私の学年は8人の入局がありました。私の上下の5学年で30人余りの脳外科医がいました。山梨医科大学へは、貫井教授以下14人余りが一挙に赴任しましたが、群馬大学脳神経外科医局も特に困らなかったと思います。

山梨医科大学に赴任当初は、現在と比べまだ手術件数も少なく、研究をしようにもゼロからの出発なので苦労しました。私は群馬大学からの継続で、脳腫瘍の臨床と研究を担当してきました。今思い返すと、研究の基盤作りに焦っていたと思います。脳腫瘍の腫瘍免疫学に興味があり、まず免疫学教室の田坂先生の所にしばらく出入りしていました。その時、田坂先生の紹介でスウェーデンのカロリンスカ研究所の免疫学教室に平成元年に留学する機会が得られました。帰国後も腫瘍免疫の研究を続け、やっと学会に発表できるような結果が出始めました。しかし、長い歴史のある大学と比べると量と質がなかなか及ばない点が苦労しました。

平成17年8月に縁あって国立病院機構甲府病院に院長として赴任し8年余りが経過しました。大学を離れて外から大学の意義を考えると、大学は医師を育てる所であり、研究をする所であるというのが、第一義であると思います。

その為には、大学にスタッフ医師がある程度必要ですが、現在の気がかりな問題は大学の医師が減っている事です。卒後研修制度が始まってからの問題ですが、この制度はしばらく変わらないでしょうから、大学病院が学生にとって魅力あるものになって行く必要があると思います。また、地域の病院も大学から医師を派遣してもらっている現状があり、医師にとって魅力ある病院になることも、医師が山梨に残ってもらえる大事な要素であると感じています。



はなみずき

元理事（財務・医療担当）
元病院長

塚原 重雄

ブエノスアイレスの国際オリンピック総会で、東京が2020年大会の候補地として選ばれました。素晴らしいことです。日本の招致チームの一人ひとりが、東京オリンピック開催という目標に向かって一致団結して、力を発揮した結果です。これを見ながら、チーム力、目標を持つということが如何に大切か、改めて認識しましたし、感動しました。小生の病院長の時にも、本当に職員皆が協力してくれて、患者さん中心の医療を目指して、楽しく仕事ができましたし、当時の皆さんに感謝の気持ちで一杯です。このたび山梨大学附属病院開院30周年記念誌を発刊に当たって当時のことを書いてくださいとの依頼があり、平成11年4月から平成15年10月まで約4年6か月、私の山梨医科大学病院長時代の中で就任当初の出来事を、小生のメモ帳をくくって思い起こしてみました。

吉田洋二学長が、私を病院長に指名された2ヵ月後の平成11年6月に全国国立大学附属病院長会議が山梨医科大学担当で開かれることになっていました。議長役を担当大学附属病院長を務める慣わしと知って、開催までの2か月間、必死になって、退官間際の老化した脳細胞に、国立大学附属病院の課題についてインプットしました。幸い、知識不足を露呈することなく、皆さんの協力もあって、甲府市内の富士屋ホテルで48名の全国国立大学病院長をお迎えして、2日間にわたって開催された会議を無事終えることができました。その時の議題が1) 国立大学附属病院で患者さん中心の診療を進めるには、2) 国立大学病院の管理、運営改善を図るには、3) 国立大学附属病院長のリーダーシップを発揮させる体制を作るには、4) 国立大学附属病院の情報化への対応は、の4点でした。私にとっては初めての国立大学附属病院長会議で、しかも議長として会を仕切らねばならないので、大変緊張しました。後に、出席されたある病院長から、今まで、東京大学を先頭にした護送船団方式で、親方日の丸的な管理運営をしてきた国立大学の附属病院会議では考えられないような先進的な内容で、予想以上の質疑応答が行われ、会議は盛り上ってよかったと褒められました。実際、それからの国立大学附属病院の運営管理の流れを見ると大変時宜を得た議題でした。

この国立大附属病院長会議の経験から、多くの問題を抱え、徹底的な変革を求められている大学附属病院の経営管理は、私一人では無理だと判断し、病院運営改善推進室を設けると共に、副病院長制を敷くことを決め、貫井英明脳外科教授、中澤眞平小児科教授、大村久米子看護部長を指名させていただきました。それぞれの担当分野を決めることはしませんでした。適任であったと自負しています。また、病院の理念を掲げる必要があると考え、病院のモットーを公募しました。その中から採用したのが「一人ひとりが満足できる病院」でした。この理念には病院に来訪された患者さん、付き添いの方、皆さんが満足されることは勿論、院内で働いている職員、学んでいる学生も満足する環境であるという意味が含まれていました。これを旗印に、病院の一人ひとりの職員が、各部門で、自分で計画を立て、自らそれを実行し、その問題点を検証して、更に改善して行くという良いサイクルが生まれれば、附属病院の管理、経営の改善は軌道に乗ると考えました。すなわちPDCAサイクルの実効です。このように病院構成員一人ひとりの意識を変えるために、国立大学附属病院ではまだどこも受けていない「病院機能評価機構」の外部評価を受けることを決め、実行に移しました。幸い、これも病院職員全員の協力を得て、審査を一度でクリアしました。その前に、病院長に就任した直後に、全科の科長、部門長、看護師長、技師長に面談し、それぞれの部門で、問題点は何か、それを解決する手立てを探りました。また、各科、医師、看護師、技師、事務官から成る8チームを作り、それぞれのチームが、病院に到着して駐車場に車を置いて、正面玄関から病院内に入って、外来受付をし、各科外来で診察を受けて、病棟に入院するまでの過程を、患者さんの立場

になって、改善点を洗い出してもらいました。その結果、300項目にわたる改善点が発見されました。それを逐次優先順位を設けて改善に取り組みました。その一つとして「駐車場の有料化」「構内美化運動」「サインの改良」「トイレの改良」等が挙げられます。「患者満足度調査」を全入院患者さんに実施し、各部門の活動に反映させるようにしました。有り難いことに、これに応えて、職員一人一人がそれぞれの役割を認識し、その能力を十分に発揮してくれました。更に公正、公平な科別、部門別、評価が可能となれば、病院長のリーダーシップのもと、有限の医療資源を有効に配分することができるのではないかと考えて、平成11年から14年にかけて「国立大学附属病院経営管理指標の策定と部門別評価システムの構築に関する研究、課題番号11800001」という題名で科学研究費補助金申請をしました。幸い認可されて3年間、毎年600万円の特別研究促進費をいただくことができ、山浦晶千葉大学附属病院長、斉藤英彦名古屋大学附属病院長、紀ノ定保臣岐阜大学情報部長等の学外の先生方にも参加をお願いして課題研究をスタートし、平成14年には研究成果報告書を完成するとともに、病院運営改善推進室の機能強化を図り、「頑張った部署が報われる」体制作りを目指しました。当時の佐藤弥情報部部長、事務局長佐藤義男さん、事務官の石原義久君に大変お世話になりました。この研究にあたって、海外医療機関で、先進的な大学病院の管理運営をしているMayo Clinic, Seoul大学附属病院、延世大学附属病院、UCSF Medical Center, Hawaii大学The Queen's Medical Center, Kuakini Medical Centerを訪問して、各病院のスタッフに面談し、管理運営を調査し、その分析方法や、医師を含め医療従事者の診療、教育、研究、それぞれの評価方法を学びました。当時、日本は経済沈下が著しく、少子高齢化による社会構造の変化、グローバル化の波を受け、国立大学附属病院を取り巻く環境が過去に類を見ないほどきびしい状態でしたが、山梨医科大学では、職員それぞれの意識改革が一層進み、山梨医科大学附属病院の管理運営面での成績が著しく好転しました。実際、平成11年から14年にかけて文部省の評価で、48国立大学附属病院の中で、山梨医科大学附属病院は1位から4位の好成績でした。これを見て、文科省は全国の国立大学附属病院に向かって、山梨医科大学附属病院を見習えと大号令をかけていました。このことは文科省が導入した経営管理分析システムで、各大学附属病院の外来患者数、入院患者数、稼働率、手術件数、差定率、紹介率、収支率等いろいろな指標を使って総合的に評価し、毎年公表されるデータに裏打ちされていて、何人かの国立大学病院の病院長が見学に訪れました。附属病院を構成する様々な職種の皆さんが、少数精鋭で、一丸となって協力してくれた賜物で、病院職員皆が喜んでくれましたし、励みになりましたし、また、誇りに思いました。その結果、4年半の病院長職の間に、国立大学病院長会議で、3回も研究成果と山梨医科大学附属病院の現状を発表する機会があたえられたことは光栄でした。

平成11年の末には、山梨医科大学附属病院の情報を共有しあって、病院運営を円滑に進めようという意図で、病院運営改善推進室が中心となって、病院便り「はなみずき」を発刊しました。「はなみずき」の命名は私がしました。

山梨大学医学部構内の道路沿いに、また大学進入道路沿いに植えられた「はなみずき」が年々大きくなって、毎年春になると、雪が多くても少なくても、雨が多くても少なくても、天候に左右されることなく、ピンク色の、あるいは白い見事な花を咲かせ、道行く人を喜ばせています。附属病院も山梨医科大学附属病院から山梨大学附属病院に名称は変わり、取り巻く環境も、構成員も年々変わりますが、「はなみずき」と一緒になって、年々成長し、地域医療の拠点病院として教育、研究、診療の中核病院として、人々から選ばれる、愛される大学附属病院になってほしいものです。



山梨大学医学部附属病院開院30周年 おめでとうございます

前理事（財務・医療・施設担当）
前病院長

星 和彦

山梨大学医学部附属病院が開院して30年を迎えられたとのこと、心よりお祝い申し上げます。私が山梨大学に在籍いたしましたのは、平成8年～23年でしたので30年のちょうど半分にあたります。勿論現在はこの大学にも負けない立派な大病院ですが、全くゼロからスタートしたわけですので、30年前の最初のスタッフには言葉では言い表せない大変なご苦労があったものと改めて敬意を表させていただきます。

私は平成17年から2期4年間 病院長を経験させていただきました。山梨医科大学の開院から数えると8代目の病院長になるのだそうですが、大学統合後の新生山梨大学の医学部附属病院になってからは熊澤初代院長の次の2代目になります。

もう記憶が定かでないことが多いのですが、思い出を思い出すままに記載してみます。当時は、前述した大学統合に続いて、国立大学の法人化、新しい初期臨床研修の導入、7:1看護体制、地域医療の崩壊など次々押し寄せる荒波に国立大学や大学附属病院が翻弄され続けていた時代でした。

国からの大学への運営費交付金のあからさまな減額・人件費の削減、それにともない附属病院の独立採算は当たり前で収支を黒字にすることが求められました。私自身、それは「100%無理」と考えていたのですが、医師を始めとするスタッフの驚異的な努力で90%を超す病床稼働率を実現させ、この難関を乗り越えてくれました。

稼働率アップの原動力である全職員の貢献にはきちんとした対応で報いていかなければなりません。先ず考えたのは、現場の意見を十分反映させる仕組みを構築することでした。既存の組織である、病院首脳部で構成される院長補佐会と診療科長（教授）で構成される病院運営委員会だけではボトムアップにならないと考え、「医長・師（士）長会」を作り、できるだけ現場の声を重視するようにしました。また、女性医師・看護師の増加に伴い予てから要望の強かった学内保育園の整備を考えました。実現まで多くの難題を乗り越えねばなりませんでしたが、担当事務員の大変な努力のおかげで念願の「どんぐり保育園」を設置できたことは大きな成果でした。病院の玄関前に洒落たコーヒーショップを作り、患者さんや面会の方々はもとより、スタッフの憩いの場にしたいとの思いから「スターバックス」を誘致することができたのも嬉しい出来事でした。今でこそ全国の大学病院に同じようなコービショップを多く見かけますが、国立大学では山梨が先陣を切った試みでした。スタバは軽井沢にある店舗を参考に様式を考えてくれました。

文部科学省や大学本部からのプレッシャーがきつかったことは間違いありませんでしたが、今考えると院長時代の4年間は楽しく仕事をすることができました。大過なく任期を全う出来たのも、私を全面的に支えてくれたスタッフのおかげと感謝しております。副院長をしていただきました、島田先生（1,2期目）、佐藤先生（1,2期目）、小林先生（1期目）、荒木先生（1期目）、藤井先生（2期目）、久木山先生（2期目）、大村看護部長（1期目）、鈴木看護部長（2期目）、秘書をしていただきました小松潤子さん、そして全職員にこの場を借りまして厚く御礼申し上げます。

新しい放射線治療棟に続き、新病棟の建設も順調に進行していると伺っています。山梨大学医学部附属病院の益々のご発展を祈念しております。



昭和の語り部として

元看護部長
平川 美代

「開院30周年記念」と、言葉にすればたったの8字だが、その時その場でその任を全うすべく精一杯生きた人々の、夢とロマン、熱意と努力、汗と涙の集大成としての現在であると言えようか。

その素晴らしい流れの中であって、私ごとき存在はケシ粒ほどにも及ばないが、記念誌への寄稿を許され感激。語り部の心境で今、静かに紙面に向かう。しかし私の関わったのは、56年4月、病院創設準備室（室長以下7名）が設置された時点から開院当初の数年に過ぎない。

57年4月、看護部門は5名増員され、準備作業に拍車がかかる。まずは、看護の旗印を挙げた。「プライマリーナーシングの理念を生かした、チームナーシング+担当看護婦制とする。」「POSの理念を生かした看護記録とする。」の2点。

58年4月、準備室は解散、看護部が設置され47名増員された。白衣を着ていないナース集団は、各セクションに分かれて、具体的な原案作りに入る。連日のデスクワークで議論を闘わせるが、様々な所から集まって来た人々の意思統一は並大抵ではなかった。しかし、半年後の開院を目指して「私たちの手で足で頭で心で、新病院を作るんだ」と言う意気込みは目を見張るものがあった。

同年9月、更に増員され、この頃はシミュレーションに明け暮れた。皆であんなに考えてこの形にしたのだ、と言う少々の自負と、之で良かったのか？と言う底知れぬ不安との葛藤の中で迎えた10月12日診療開始日（321床9看護単位）この日、外来患者153名、入院3名と記憶している。

その後、西病棟竣工に伴い増床され、60年4月、600床完成15看護単位となった。それぞれの時期に、精一杯努力した人々の笑顔が仕草がそして涙の数々が、今でも瞼の奥から消えることは無い。

しかし如何にせん、当時のナースの平均年齢は25.5歳、経験年数は浅く、気力は十分でも実力が伴わない。周囲からは、不甲斐無い集団とみなされていたと思う。でも、心ある人々の励まし手助け、時に厳しく指導されて現在がある。

さて、止まることの無い医学の進歩発展、医療を取り巻く社会通念の変化、合わせてIT社会など等。これらの時流に乗り遅れる事無く研鑽を積み、今此処にある自分だから出来る「最高の看護ケア」を実践し、自信と責任を持って次の世代に引き継いでいかれる事を、現役の諸姉に期待する。

30周年の今、新病棟建築の槌音が高らかに響いている。あたかも病院の未来を祝福するかのごとく。「輝け！大学病院」この一言に万感の想いを込めて、語り部の項を閉じさせて戴くことにする。



私の山梨医科大学時代

元山梨医科大学事務局長

佐藤 義男

私が山梨医科大学事務局長の内示を頂いた時、思ったことは「山梨医大病院の運営は？」ということでした。何故ならその頃大学病院の赤字体質が大きな社会問題となっており、その解決のための対応が各大学病院の急務になっていたからです。その頃私は北海道大学病院で病院長、看護部長、診療科長、事務部門のみんなと共に、赤字解消に取り組んだ経験があったからです。赤字の原因は、色々考えられたが、大きな原因の一つに、医師と看護師と事務側の意思の疎通が欠けていたということです。大学病院は診療も大事ですが、教育の面も大事な役目で、どちらも医師としての教官の力は絶大ですが、診療は医師だけでなく、看護師、放射線技師等みんなの力が必要です。当時の北海道大学病院の病院長はこの点に着目し、病院全体会議と称して医師、看護師、技師、事務職員等を一堂に集めて大学病院の現状を説明し、どうしたら改善できるかを皆で討論しながら進め、その努力の甲斐があって改善することができた訳で、このことは私に大きな自信をつけてくれました。このようなことがあったので、山梨医科大学への内示があったとき、真っ先に思ったことは、大学内の意思疎通はどうか？お互いが反目し合っていないか？ということでしたが、本大学病院の病床稼働率は、常に全国の中でもトップクラスでしたので、私の心配は杞憂に終わったと思います。お互いが相手を尊重するという考えは、山梨医科大学病院では以前から浸透していたと思いました。

私が山梨医科大学に赴任したのは平成9年4月の初めで、長いトンネルを抜けた後、車窓に広がった眼下の甲府盆地が桃色に染まり、綺麗だったことを鮮明に記憶しております。

山梨医大在中は皆さんに色々な所に連れて行ってもらいました。ゴルフ場は勿論、おそばツアーと称して、増穂の山奥や、昇仙峡の荒川ダムの奥、甲斐大和の武田家滅亡のお寺の奥の蕎麦屋、県内だけでなく、信州松本近くの蕎麦屋などに連れて行って貰いました。また、日本第二位の高山、北岳とか金峰山、瑞垣山など、色々な山にも連れて行って貰いました。そして、神明の花火ですが、あんなに傍で見たのは初めてでした。まだまだ沢山の楽しい思い出がいっぱい残っております。公務員生活最後の2年間を山梨医大で過ごせて幸せでした。皆さん本当にありがとうございました。



「一歩前へ」のことばに支えられて

看護部長

岩下 直美

私は30年間、この病院と共に成長できたことを幸せに感じている。

昭和58年4月1日に開院準備要員として、東京の大学病院から転任してきた時、田んぼの中にスツクと立つ病院の姿に、何かが始まる期待と自分に何ができるのかという不安で胸がドキドキした覚えがある。開院準備は「患者さんが安心して療養できる病院作り」を目指して進められた。その心は今も病院全体で共有される基本である。開院当初の看護師数は115人であった。看護補助者もなく、患者さんの療養上の世話から診療の補助、環境の整備、物品管理など全て看護師の手で行なわれた。その中で、私たちが最優先して実施すべきことは「患者のケアに責任を持つこと」であった。私はベッドサイドで看護できることの喜びで毎日が楽しくて仕方なかった。初めて看護部長になった時の看護師の平均年齢は25.5歳であり、経験年数は1年目から3年目がほとんどを占めていた。しかし、困難な状況にあった時も心一つにして看護に取り組む仲間として力強い支えとなり課題に立ち向かうことができた。

現在、看護師は512人となり、私自身も病棟師長、感染管理師長、ゼネラルリスクマネジャー、副看護部長などいろいろな経験をさせてもらい、今は看護部長の職にある。どんな役割を担う時も私の背中を押してくれた言葉がある。それは、初代平川看護部長の「一歩前へ」という言葉である。判断に迷う時、悩んだ時にこの言葉は強い味方であった。一歩前に進もうとする時、この病院には力を貸してくれ人がある、支えてくれる人がある、それを信じられたから一歩前に踏み出せたと思う。

30年をかけて当院は地域から信頼され、期待される病院に成長し、役割も年々拡大している。病院の住所も玉穂村から玉穂町そして中央市と変化した。その間に、病院機能評価を3回受審しており、いずれも1回の審査で承認を受けている。一つの目標に向かい全病院の力を結集し各部門が協働した成果である。今後、社会の情勢がどんなに変化しようとも、当院の理念である「一人ひとりが満足できる病院」をめざし、一人ひとりが一歩前に踏み出す勇気を持つことで、病院全体がひとつのチームとして新たな課題や困難な問題に取り組むことで、山梨大学医学部附属病院としての発展と成長が続けられると考える。私もこの病院の仲間と共に一歩前への歩を進めていきたいと思う。



開院30周年に寄せて

医学部事務部長
白沢 一男

このたび、山梨大学医学部附属病院が開院30周年を迎えるにあたり、まず、文部科学省、山梨県を始めとして、本院の発展にご尽力いただいた皆様に感謝し、事務部長として、お祝いと思い出の一端を述べさせていただきます。

私が、山梨医科大学に赴任したのは、開院の2年半前の昭和56年4月でした。当時は、講義実習棟、研究棟しかなく、病院は建設を始めたばかりでした。

まず、配属となったのは、会計課用度係というところで、面接のとき、体は丈夫かを特に問われました。その理由は、これからまさしく開院に向けての大事業があるので、当時の庶務課長が体力の確認をしたのだと思われます。ところが、転任してみると当時の会計課は、開院の2年前ということもあり、わりとのんびりしておりました。大学全体が古きよき時代ということもあった様に思われます。しかし、そののんびりした時代も長続きはしませんでした。昭和57年の秋ぐらいから、開院に向けての物品調達が始まり、いつの間にか、その渦中にいました。昭和58年になると、途端に準備が加速し、私たち用度第二係は、臨戦態勢に入りました。

当時の会計課用度第二係は、係長を除いて、私が29歳の最年長で、超若手の布陣でした。勤務時間は、現在では考えられないような、24時間営業状態でした。しかし、開院という一つの目標に向けての仕事だったので、若さもありましたが、何とか乗り越えることができました。勤務場所は、現在の病院食堂「つどい」の位置にあり、開院前は、先生方も看護師さんも皆私服です。夜遅いときは、いつも看護師さんに「大丈夫？」と声をかけられました。このような中で迎えた昭和58年10月の開院式は今でも忘れられません。

あれから、20年以上経過した、平成21年8月には、縁あって私は、医学部事務部長を拝命いたしました。今進めている病院再整備には当初から、関わることができ、平成22年から23年にかけては文部科学省にも日参し、お蔭様で今年5月に起工式を迎えることができました。私にとりまして、「山梨大学医学部附属病院」の強烈な印象は、やはり開院時の数年間と、島田病院長のご指導の下に事務部長として、30周年を迎えることができました最後の4年間であります。最後の4年間は、病院機能評価受審、マッチング問題、コメディカルの常勤化、看護師の退職手当の見直し、度重なる不祥事対応など、いろいろなことを経験しましたが、何と云っても、一大事業は、東日本大震災における被災地支援であります。3日に一度、早朝のスターバックスでの島田病院長、関係者との打合せ、帰ってきた班からの報告、この時ほど、我が病院は、一つのチームと感じた事はありません。

今年度定年で事務部長を退くため、新病棟のオープンは、間に合わないわけですが、このように二度の開院に向けての業務に参画でき、素晴らしい「日本一の病院」に勤務できたことを誇りとして、これまでご指導いただいた皆様に感謝し、残りの半年を微力ながら、山梨大学医学部附属病院発展のために尽くしたいと思っております。



開院30年を迎えて

看護部・3階東病棟看護師長

高野 和美

今から30年前の当院の景色は、市川大門線から陸橋を渡ると田んぼ・畑の中にポツンと大きな建物があり萱が道を覆っていた。野犬に注意するように防災放送が流れていた。いくら昭和時代とはいえこれから自分はどうなっていくのだろうと、山梨で生活するのが初めての私は不安でした。ただ毎日富士山がみられることはうれしかったです。

開院時の配属は3階東病棟でした。看護職員は12名、大学病院・県立病院など色々な病院で3～5年の経験を積み集まった集団でした。1つの処置でも考え方や方法が違い、自分達の方法を決定するためにみんなで意見交換をしたことが、現在の看護基準・手順の基となっています。開院に向け患者を迎える準備を体験できるのは助産師の本当に一握りの人です。とてもよい経験になりその後の自分にとってこの時に得た知識が、看護師としての方向性を考えることに役立てられたと思います。しかし今考えると若い集団だったからこそ、怖いもの知らずに行動できたのではないかと考えます。

開院時3階東病棟は現在と同じ18床産科単科です。(これからの情報は初代の産婦人科教授 加藤順三先生から拝借しました)。10月12日産婦人科医師7名全員外来に集合しました、外来患者は11名でしたが予測したよりも多く診療用器具が不足し、病棟のものを使うなど大混乱でした。入院患者は他院より紹介された1名が早速入院です。初めての分娩は開院を待っていたように10月13日午後7時47分に当院の看護スタッフでした。初めての帝王切開は10月14日に行われています。新しくできた病院だから少し余裕を持ってお産に取り組むつもりだった私たちは毎日業務に追われながら病棟作りをしていきました。

また婦人科は今看護部のあるフロアの4階中病棟(知っている人がどのくらいいるのでしょうか)でした。酸素や吸引の中央配管がされていなかったために、子宮広汎全摘手術の患者や重篤の患者は301号室の4床部屋を個室にして使用しました。小児科も混合病棟だったため、未熟児・新生児の手術後は新生児室で対応していました。始めて見る事例であっても「できない・無理ではなく、診なくてはいけない、やらなくてはいけない」が私たちの合言葉になっていました。

スタッフメンバーが変わっても3階東病棟の根底にはこの合言葉が生きています。国立大学で初めての助産外来・院内助産を立ち上げに際しても期限が切られた中で実施できた事が証明でしょう。

平成25年スタッフ全員が助産師となりました。27年には新棟に5床の院内助産ができます。今までの歴史に安心するのではなく常に新しい課題と取り組み院内助産で助産師に分娩を見て欲しいと県内どこでも言われるよう努力していきます。



開院から30年間の私の歩み

検査部・副臨床検査技師長

雨宮 憲彦

山梨大学医学部附属病院開院30周年おめでとうございます。

東京で就職していた私は当院（前山梨医科大学医学部附属病院）へ採用が決まり、昭和58年4月より勤務いたしました。着任当時の検査部はまだ準備室であり、各検査室レイアウト、分析装置、試薬、その他の備品・消耗品の選定、検査伝票・報告書、システム運用など開院に向けての仕事量は膨大でしたが、通常の検査業務では経験できない充実した期間でした。当時の周辺は田畑が多く民家はまばらだった風景も、若宮地区・成島地区の環境整備、平成16年新山梨環状道路開通、平成18年市町村合併で玉穂町から中央市になるに従い、病院周辺は開けて環境もガラリと変わりました。開院時の検査部メンバー（14名）も現在では小池亨技師長、雨宮（私）、内藤主任、小岩井主任の4人のみとなり、30年間という歳月を実感しています（弓納持技師長、石井副技師長は病理部へ配置換）。

これまで私は血液検査室・生理検査室・血清検査室で業務してきましたが、血液検査室をメインに学会活動を行ってきました。研究テーマは先天性血栓性素因であるProtein C、protein Sの検査法と各疾患の動態、PTの標準化、凝固線溶マーカーの検査法、MYH9異常症などです。これらの研究は臨床検査医学講座：尾崎由基男教授、久米章司前教授、矢富裕前助教授（現東京大学大学院医学系研究科臨床病態検査医学教授）、内科学第二講座：小林勲前助教授、輸血部：柳光章前講師、血液・腫瘍内科学講座：桐戸敬太教授、小松則夫前教授（現順天堂大学医学部内科学血液学講座主任教授）、小児科学講座：杉田莞爾教授、中澤眞平前教授、細萱茂実元技師長、遠藤武前技師長のご指導・ご協力を賜り、学会発表や論文を出すことができました。

また、病院の活動では東日本大震災被災地での医療支援活動やDMAT活動に参加し、貴重な経験ができました。今後の防災対策やトリアージ訓練に役立てたいと思っています。

今年度検査部はISO15189認定を取得しました。これからも各臨床科からの要求に応えられる質の高い検査データの供給、医療チームとしての活動、患者サービスの向上、検査相談などを充実し、病院の理念である「一人ひとりが満足できる病院」として貢献していきたいと思っています。



開院30周年に寄せて

放射線部・副診療放射線技師長

新井 誉夫

放射線部のこれまでの30年間について述べる事は技師長にお任せすることとし、私は自身のことについて振り返らせていただきます。30年と言えば長い年月のようですが、自分にとっては本当にあっという間の事の様でもあります。開院時は16診療科321床とスタッフは臨床医102人、看護師120人、臨床検査技師10人、薬剤師10人、そして診療放射線技師は7人でありました。附属病院の体制としては原則紹介患者のみの受け入れということでのスタートでした。当放射線部の7人の内、開設準備のための技師長を除く6名はその年の4月に赴任しました。2名の県内出身者と他4名は県外出身者です。さしずめ7人の侍です。私は東京の私立大学付属病院から山梨の地に参りました。放射線部は一般撮影、血管撮影、CT、治療、核医学部門に分かれ、技師長と副技師長は全体の把握を、他の5人がそれぞれの部門を担当し、私は核医学部門の担当でした。当時の山梨の核医学施設は全国でも下から数えて5番目ぐらいだったと記憶しています。(現在は2、3番目位なのではないかと思います。)しかし核医学診療レベルは施設数ではなく内容にあります。当時山梨の施設は附属病院をいれて6施設、現在は5施設(PET施設を含めず)です。そのため核医学臨床及び技術の向上をめざし故内山教授、初代技師長らによって山梨核医学診療研究会発足に至り、私もそのお手伝いをさせていただきました。以来今年で46回を迎え、活動は学会等にその研究成果の発表等を行っております。

生活面で初めに戸惑ったのは、地元の言葉(方言)がわからない事、聞いてはいたもののドライバーの運転マナーに驚かされました。田畑の中にぽつんとひとつだけそびえる病院を何とも不思議に感じながら眺めたことを思い出します。当時は市川大門線から一本の道路が病院の方に走っているだけでした。田圃道を一步間違えたものなら病院は見えるものなかなか到着できないという失敗談によく笑ったものでした。他部門の人々との交流もあり、とくに私は官舎住まいでしたので、同期に入居した検査技師、薬剤師、理学療法士や栄養科の方々等と家族ぐるみで仲良くさせていただきました。数年の内にも官舎では多くの出会いや別れがありました。互いに子育ての頃であった為か、官舎を出た今でも子どもの成長と共に懐かしい思い出を共有できているように感じます。

30年の月日の流れは、当然の事ながら自身の定年という言葉がそこまで運んで来ています。改めて振り返り見ますに、核医学検査一筋に山梨大学附属病院と共に歩め、病院30歳の時を迎えられます事は感慨とともに病院の更なる発展を願うものであります。